様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 16 日現在

機関番号：32644
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22500551
研究課題名（和文）　「体験活動」における「身体的体験」の研究
研究課題名（英文）　A Study of the Physical Experience in a variety of nature experience and other hands-on activities

研究代表者
久保　正秋　　（KUBO MASAAKI）
東海大学・体育学部・教授
研究者番号：30119672

研究成果の概要（和文）：本研究は「体験活動」における「体験」を「身体的体験」として捉え直し、「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探ることを試みた。その結果は次の通りである。1）現状の「体験活動」プログラムでは体験そのものではなく、体験による結果，効果を重視している。2）身体的活動そのものの「意味生成」の体験を重視しなければならない。3）「感性の教育」という観点から見れば、活動の瞬間（現在）が本質であり、それは結果（未来）のための手段ではない。

研究成果の概要（英文）：This study examined a variety of nature experience and other hands-on activities (MEXT), and tried to investigate the possibility of Physical Education as the education for KANSEI(sensibility) .The result of this examination were as follows: 1)The present program of nature experience and other hands-on activities made a point of not so much the experience itself as the result and the effect. 2) It is important to regard the experience of physical activities as “Semantic Generation.” 3) In the light of the education for KANSEI(sensibility) , the moment of activity (the present) is essential and is not a means to an end (the future).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　・　身体教育学
キーワード：体験活動・身体的体験・感性の教育・生成としての教育

１．研究開始当初の背景

本研究は、青少年の健全育成のために推進されている「体験活動」における「体験」を、「身体的体験」として捉えなおし、それを「身体運動」を中心とした「身体的体験」プログラムを構築しようと試みる研究である。この目的は、「体験活動」における「体験」が、単に一過性の「経験」や知識としての理解に止まるものではなく、青少年の人間としての「生成」を生み出すべきという考えに基づいて設定された。

本研究はこれまでに、研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「場」の検討：平成 15-16 年度基盤研究 C-2（課題番号 15500420)、研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「メディア」の検討：平成 17-18 年度基盤研究 C-2（課題番号 17500408)、及び研究課題名：地域における総合的「身体教育」のための「体験」と「教育的空間」の検討：平成 19-20 年度基盤研究 C-2（課題番号 19500512）の研究助成を受け、総合的「身体教育」とその「体験」に関する研究を進めてきた。この総合的「身体教育」とは学校における体育の授業を含みながらそれを超え、総合的学習の時間、学校行事、あるいは社会的活動における「身体に関わる教育（身体教育)」を意味した広い概念である。これらの一連の研究において「身体的体験」は「感性の教育」と成り得ることが示唆された。今回の研究は、これらの研究成果に基づいて着想されたものである。

２．研究の目的

本研究は「感性の教育」を「身体教育」という立場から再検討することを試みるものである。そのために、感性を育むと言われている「体験活動」における「体験」を「身体的体験」として捉え直し、「身体運動」をメディアとした「身体的体験」プログラムのモデルとその要素を明らかにし、「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探ることを目的とする。

３．研究の方法

（1）本研究では、まず、1)「体験活動」における「身体運動」の位置づけを明らかにするために、1-1)「身体」と「身体運動」に関する教育的理論の検討を行う。ここでは従来のスポーツ種目に囚われない幅広い人間の「身体運動」とその教育的意義を論じる。さらに、1-2)「体験活動」における「身体運動」の実態を調査する。ここでは実際の「体験活動」においてどのような「身体運動」が生起しているのかを調査する。この二つの方向から「体験活動」において「身体運動」がどのように位置づけられるのかを明らかにする。

（2）次に、2)「身体的体験」の概念と実際を明確にするために、2-1)「身体運動」と「体験」の理論的検討を行う。ここでは、教育哲学における「意味生成の理論」に基づいて「身体運動」とその「体験」がどのように人間の「生成」に関与していくのかを明らかにする。さらに、2-2)「体験活動」プログラムにおける「身体運動」の分析を行う。ここでは「身体運動」が、現状の「体験活動」プログラムの中でどのように展開されているかを明らかにする。これらのことによって、「身体的体験」という観点からの新たな「体験活動」のプログラム化のための基本的事項を明確にする。

（3）最終的に、以上の理論的検討と調査に基づいて 3)「体験活動」における「身体的体験」プログラムのモデルを検討する。そのために、3-1)「身体運動」をメディアとした現状の「身体的体験」のプログラムを調査する。次に、3-2）モデルとなるプログラムの要素を検討する。

（4）これらの結果に基づいて、再度、「体験活動」における「身体的体験」の重要性に関して論考を進め、「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探る。

４．研究成果

（1）本研究は、まず、1)「体験活動」における「身体運動」の位置づけを明らかにするために、課題 1-1）.「身体」と「身体運動」に関する教育的理論の検討、課題 1-2）.「体験活動」における「身体運動」の実態調査を行った。

課題 1-1）に関しては、従来の「発達の論理」が支配する教育ではなく「生成としての教育（矢野・亀山)」という観点から「身体運動」を捉え直し、それをルソー、デューイ、ヤスパースの教育に関する論議のなかに位置づけることを試みた。その結果、ルソーの「自然」、デューイの「経験」、ヤスパースの「自己生成論」において、教育としての「身体運動」の新たな位置づけを見出すことができた。すなわち「身体運動」は、人間の身体的発達において教育的価値を有するのみならず、ベイトソンの「三重のサイバネティックスモデル」において人間（「個のシステム（Ⅰ)」）が「社会システム（Ⅱ)」を超えて「エコ・システム（ルソーの自然）(Ⅲ)」へ溶け込み、「自己という存在の意味」を知る

ことによって「自己生成（ヤスパース）」という「体験（デューイの経験）」を生起させる点においても教育的価値を有するという位置づけである。これらの成果を纏め、日本体育学会第 61 回大会体育哲学専門分科会シンポジウムにおいて口頭発表を行った。さらにその内容を「体育哲学における学校体育論議の検討と視界　体育哲学の視界　−体育はこどもたちをどうしたいのか−」として纏め、体育哲学研究に投稿し、受理された。

課題 1-2）に関しては、先の「エコ・システム（自然）（Ⅲ）」における「自己生成」の「体験」が、実際の「体験活動」においてどのように生起するかの検討を試み、現状の「体験活動」プログラムにおいて「身体運動」がどのように位置づけられているかの調査を行った。その結果、多くの「体験活動」プログラムが「身体運動」を活動の中心としているものの、その結果によって得られる「経験」を重視し、「身体運動」そのものの「体験」に注目していないという実態が明らかとなった。

（2）次に本研究は、2)「身体的体験」の概念と実際を明確にするために、課題 2-1）．「身体運動」と「体験」の理論的検討、課題 2-2）．「体験活動」プログラムにおける「身体運動」の分析（調査）を行った。

課題 2-1）に関しては、身体運動における「体験」が生起する時間に注目し、ベルグソン、バシュラール、ボルノーらの展開する時間性の問題を検討した。その結果、先に示したベイトソンの「三重のサイバネティックスモデル」、その「個のシステム（Ⅰ）」が「社会システム（Ⅱ）」を超えて「エコ・システム（Ⅲ）」へ溶け込むという自己生成の「体験」は、直線的な連続した時間において生起するものではなく、非連続的な「瞬間」において生起するものであると論じた。これらの論考は、その一部を「余暇の本質に関する一考察　−時間性についての試論−」として纏め、東海大学紀要に投稿し、受理された。

課題 2-2）に関しては、典型的な「体験活動」プログラムのなかで「身体運動」がどのように展開されているかの調査を行い、「生成の体験」との関連性を分析した。その結果、「身体運動」そのものの種別と「生成の体験」との関連性を明らかにする事項を認めることはできなかった。このことは、「生成の体験」が人間の身体運動を基盤とするが、身体運動そのものに依存するのではなく、個別性を有していることを示唆している。

以上の研究結果から、感性教育としての身体教育の実践面からのアプローチを試みる本研究は、身体運動の「体験」の時間性と個別性という観点から検討する必要性が認められた。これらの論考は、日本体育学会第 63 回大会組織委員会企画シンポジウム（2012 年：東海大学）において、「子どもを育てる運動・スポーツの現状と課題　スポーツは人間を形成するか」という演題で発表した。

（3）これらの研究成果に基づいて本研究は、3)「体験活動」における「身体的体験」プログラムのモデルの検討のために、課題 3-1）．「身体運動」をメディアとした現状の「身体的体験」のプログラムを調査し、課題 3-2）モデルとなるプログラムの要素を検討した。その結果、現状の「身体的体験」プログラムが、その「体験」によって生じるところの何らかの社会的効果、すなわち、先の課題 2-1）で明らかにした「三重のサイバネティックスモデル」の「社会システム（Ⅱ）」における効果を求めてプログラム化され、「体験」の「いま、ここ」において生じている「意味生成」に関しては

を超えて「エコ・システム（Ⅲ）」へ溶け込むという自己生成の「体験」

先に示した、時間性と個別性の問題が再度確認された。

（4）本研究は最終的に、「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探るために、「生成の体験」をもたらす「体験活動」のモデルとなるプログラムを検討した。そのために、「生成の体験」をもたらす典型的な「身体運動」として「スポーツ運動」を取り上げ、先に重要な要素として

、そこにおける「時間性」の問題を考察した。

「感性教育」としての「身体教育」の可能性を探る

これらの研究成果は、「意味生成としての『スポーツ運動』体験の時間性」として纏め、体育学研究に投稿し、受理された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
①<u>久保正秋</u>ほか、「スポーツ＆レジャー」教育の方向性と課題、東海大学紀要体育学部、査読有り、第 40 号、2011、1-7
②大橋道雄・<u>久保正秋</u>ほか、体育哲学における学校体育論議の検討と視界（2）　学校体育論議の起点としての哲学的源泉　−体育はこどもたちをどうしたいのか−、体育哲学研究、査読なし、第 39 号、2011、29-47

③鈴木明子・久保正秋、余暇の本質に関する一考察　−時間性についての試論−、東海大学紀要体育学部、査読有り、第 41 号、2012、1-7
④栗原毅・久保正秋ほか、「スポーツ＆レジャー」教育の方向性と課題 2、東海大学紀要体育学部、査読有り、第 41 号、2012、9-17
⑤久保正秋、意味生成としての「スポーツ運動」体験の時間性、体育学研究、査読有り、第 58 号（1)、2013、243-256

〔学会発表〕(計 2 件)
①久保正秋、体育哲学における学校体育論議の検討と視界　体育哲学の視界、日本体育学会第 61 回大会体育哲学専門分科会シンポジウムA、2010（中京大学)
②久保正秋、子どもを育てる運動・スポーツの現状と課題　スポーツは人間を形成するか、日本体育学会第 63 回大会組織委員会企画シンポジウム、2012（東海大学)

６．研究組織
(1)研究代表者
久保　正秋（KUBO MASAAKI)
東海大学・体育学部・教授
研究者番号：30119672

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし